

目の健康

病気治療薬の副作用 目に影響が出る場合も

医学の進歩により、治療に有効なさまざまな薬が開発されています。もともとの病気だけに効けばよいのですが、中には副作用が出る薬があります。今回は、眼に影響が出る薬についてお話しします。

炎症や免疫を抑えるステロイド薬は、使用の量が多かったり期間が長いと白内障や緑内障を引き起こすことがあります。

胃がんや痔がんで用いられる経口の抗がん剤TS1®は、眼の表面の粘膜が荒れるため、涙の通り道が詰まって流涙を起こしやすくなるということが知られています。

結核に用いられる工タンブトールは、内服の期間が長くなると視神経障害を引き起こす可能性があります。

マラリアの治療薬として開発されたクロロキン(プラニケル®)は、全身性エリテマトーデス(SLE)にも用いられませんが、内服期間が長くなると網膜症に

なることがあります。多発性硬化症の治療薬メーゼント®は黄斑浮腫を引き起こすことがあります。

悪性黒色腫で用いられるタフィニラー®とメキニスト®は、眼の炎症(ぶどう膜炎)を起こすことがあります。

いずれの薬も本来の病気の治療には大変有用です。くれぐれも自己判断で勝手に中止しないでください。副作用の早期発見のため眼科に定期受診し、異常がある場合は治療を担当する医師にもご相談ください。

大上 智弘 先生 プロフィール

平成14年筑波大学卒業、同附属病院眼科、虎の門病院眼科・茨城西南医療センター病院眼科科長、宮久保眼科副院長を経て令和3年4月院長就任■専門分野／白内障・硝子体・眼瞼手術、日本眼科学会認定専門医、網膜硝子体学会、日本眼科手術学会員他

